

● 一般書

「八朔の雪」みをつくし料理帖(高田郁／著 角川春樹事務所)

みづは子供の頃、水害で両親を失い天涯孤独の身となった。大人になった今、神田の料理屋で江戸の人々には珍しい上方料理を任されていた。天性の鋭い味覚と料理の才があるにもかかわらず、みづの作る料理は江戸の人の口には合わず、受け入れてもらえずにいた。思い悩むみづの前に常連客・小松原が現れみづに声をかけるが…

女料理人として生きるみづに待ちうけるさまざまな試練…それに一途に立ち向かうみづの姿に胸が熱くなります。



● 児童書

「でてこい でてこい」(はやしあきこ／作 福音館書店)



はっぱに誰かがかかっている。「でてこい でてこい」と呼びかけると、ぴょーんぴょんとかえるがとびだします。四角や丸など形の描かれたページをめくると動物たちの姿が現れます。次のページは何が出てくるのかな…と子どもたちは興味深々で読みすすめることができます。白の背景にはっきりとした切り絵が映え、簡潔でリズムミカルな文章が耳にこころよい、赤ちゃんから楽しめる絵本です。

ふるさと小野町会
ふるさと小野町会
ふるさと小野町会

ふるさと小野町会
ふるさと小野町会
ふるさと小野町会

ふるさと小野町会
ふるさと小野町会
ふるさと小野町会

ふるさと小野町会の懇親会などに参加すると、あの懐かしい「ことば」が次から次へと想い出されます。かやぶき屋根にぶら下がった長くて太いつららを頬張ってなめていたこと。春のカエルの凄まじい鳴き声のこと。一寸先も見えなかった本当の“暗闇”のこと。土砂降りを思うような蚕の葉っぱを食う音…などなど、つい昨日のことのように浮かんできます。

その故郷の福島のが、2年経った今も、毎日、毎日「冷却また一時停止、福島第一原発」(4月6日付新聞)、「汚染水水漏れ再発懸念、福島原発」(同、7日付)、「汚染水水漏れ隣の槽も、

福島第一」(同、8日付)と、「福島」原発「放射能」のことがマスコミで報道され、その解決への道が見えないことにいら立ちを覚え、また個人の無力さを感じながら、やりきれない気持ちになっしまいました。

いまだ戻ることさえできないでいる被災者のこと。地域によっては農業ができなくなってしまう農家のこと。風評被害で農産物が売れなくなってしまったこと。子どもの健康が心配なこと。等、沢山の事柄について、何かできることはないか。どうしたらいいか。このまま千葉の地でのんびり暮らしているいいものかと、心が晴れずにもやもやした気持ちが続きます。

農繁期に、田植えの手伝いに「結い」に行くと言っていたことを思い出します。困難な時、困った時、この「結い」の精神が解決の糸口を見つけて出してくれるのではないかと思っています。

どこに住んでいても、故郷の「結い」の精神が人をつなぎ、故郷の大震災による被害を乗り越える原動力になって行くことを願うものです。

